

能力伸長・生田メソッド=高い目標×文武両道・文理両道×自学自習×協働×ICT
○「不確かな時代」を確かに生き抜く「主体的な意志のある自立した『個』」の育成
○「複雑な時代」を解き明かす「協働」の前提たる「主体的な意志のある自立した『個』」の育成

「不確かな時代」を生き抜くための「主体的な意志のある自立した『個』」
「複雑な時代」を解き明かすための「協働」
「協働」の前提は「主体的な意志のある自立した『個』」
「個」の鍛え方は、「文武両道」「文理両道」

文系・理系に特化した知識と思考では、「複雑な問題状況」から「解決すべき課題」を発見し、解決を導くことはできません。大学入試に特化した勉強だけでは、大学入学がゴールとなってしまいます。高校卒業後の進路をスタートにせねばなりません。だから、「文武両道」「文理両道」なのです。

「一流」のお話

「不確かな時代」にあって、「確かな進路」などありません。ですから、皆さんは、「好きな道」に進んでください。進んだ「不確かな道」で「確かな人(一流)」になってください。というわけで、「一流」のお話です。皆さんには、無限の可能性があるので、そういう皆さんに、将来の「一流」を求めるのは当然のことです。が、実はこの「一流」は、私の高校時代、3年生の時の担任の先生の口癖だったんです。

私の母校・川崎高校(以下「川高」という。)は、1927年(昭和2年)の創立です。当時と今では、学校制度が違っており、神奈川県で8校目の旧制県立中学校として創立されました。この私の母校の歴史のターニングポイントは、1969年(昭和44年)に始まった学園紛争(川高紛争)です。学園紛争の中心は大学なわけですが、川高だけでなく、高校でも紛争を起こした学校はあります。ただ、他校(高校)の紛争と川高紛争の決定的な違いは、収束までに要した時間です。長期化した川高紛争は、それまでの川崎高校のあり方を変えることで収束しました。

私の川高入学は1976年(昭和51年)、紛争から7年後です。私の住まいは川崎大師であり、川崎高校は至近の高校でした。中学3年時の担任の先生曰く、「布川はしっかりしているから、わざわざ遠い学校に行く必要はない。川高に行けば、友人関係も変わり、勉強に専念できる。」と。しかし、残念ながら、私はしっかりしておらず、川高でも勉強家ではない方々と親しくなり、中学校時代の仲間との交友も続き、予定とは全く違う方向に行ってしまいました。

1976年の川高の先生方には、紛争後の川高のあり方を是とする方、非とする方、様々でした。私の高校3年の時の担任の先生はというと、紛争後の川高が掲げた「理想」を是としつつ、それとは乖離した「現実」に立ち向かい、「なん

とか川高の学力水準を維持しなければならない」、そんな考えであったかと思えます。

進路希望が決まらない生徒に、「とりあえず大学に行け」という言い方がありました。今もあるのかもしれませんが、あまり聞きません。とりあえず、大学に行かせるほどの経済的余裕はないからです。高度経済成長は、1955年～1973年。1976年は、まだまだ高度経済成長の価値観に縛られています。「いい大学に行き、いい会社に入り、いい暮らしをする」「勉強するといいことがある」という価値観です。そんな考え方と「とりあえず大学に行け」はつながっていたわけです。

しかし、私の担任の先生は、「とりあえず大学に行け」とは言いません。「何になるのか」と突きつけて来ます。答に窮して、この先生の追及から逃れるために、とにかく急場しのぎに答えると、「おお、そうか。よし、一流になれ。」と返ってきて、さらに、「一流になるにはどうしたらいい。」と続きます。先生のしつこい指導から逃れるために答えたけれども、先生の指導は終わらない。「一流への道」が始まるわけです。「一流の大工になるには」、「一流の料理人になるには」、「一流の美容師になるには」、「一流の役者になるには」「一流の…になるには」…。

「とりあえず大学に行け」タイプの先生が否定するような進路を一切否定しない。そのかわり、「一流」を求める。「一流」を求められた生徒が出した答の多くは、「大学に行く」ことでした。どんな職業であれ、「一流」になるためには、「豊かな教養」と「深い専門」が必要だからです。（「広い教養」ではありません。「広い」と言ったときの「教養」は「知識」量に根差しています。「豊かな」と言ったときの「教養」は「人間性」に根差しています。）結局、あの先生の「一流になれ」は、究極の「大学に行け」だったのだと思っています。

大学に行かずに一流になった者もいます。専門学校に進み、そこで初めて猛勉強し、専門学校に教えに来ていた某大学の先生に認められ、弟子入りし、人生が開けた人。自衛隊に入り、やはり猛勉強し、ありとあらゆる資格を取得して、アメリカの航空会社に転職した人。結局、皆、猛勉強したのです。

「いい大学に行き、いい会社に入り、いい暮らしをする」「勉強するといいことがある」という時代は、終わりました。しかし、私のまわりには、勉強をした結果、いいことがあった人たちがたくさんいます。デジタル式の（2進法的な）知識を詰め込む勉強ではなく、「一流になる」ために、「豊かな教養」と「深い専門」を身につければ、必ず「いいこと」があります。

アクティブ・ラーニングの視点による「主体的・対話的で深い学び」の実現。デジタル式（2進法的）知識では駄目だという実社会からの要請が大学・高校に突きつけられています。「生きる力」と「偏差値で測られる学力」は、比例も反比例もしないというデータがあります。つまり、「生きる力」と無関係なものを「学力」と呼んでいるということです。私は、「生きる力」と「学力」を比例させたい。「能力伸長・生田メソッド」の目指すところはそこです。「勉強するといいことがある」の復権です。

勉強の質が変わりました。だから、努力は嘘をつきません。やり抜いて、やり抜いて、「一流」になってください。